平成２９年度　第２回東遊園地再整備検討委員会

日時：平成 30 年 3 月 19 日（月）10：00～12：00
場所：神戸市役所 1 号館 14 階　1141 会議室

議事要旨

（1）今年度の進捗報告について

- 第 2 回アドバイザーミーティングの意見のまとめについて、東遊園地の南側の機能として、例えば“神戸らしい高品質な花で都市を飾る”施設案も示されたが、食の施設など事例は他にも示されており、まちとウォーターフロントをつなぐ空間に相応しい施設の慎重な検討が必要であると認識している。

（2）再整備基本計画（案）及び今後の事業の進め方について

■再整備基本計画（案）について

- これから創りたいものについて。広場の考え方（断面図）はわかりやすい。これまで整理されているイベントは、300 万人規模の大規模なものであり、都市スケールで検討されてきたが、次年度以降は、公園の中で、50～100 人規模の多様な大きさのプログラム実施の検討も必要であるだろう。
- 特設 HP でのアンケート結果について。単に声が大きいものだけを取り上げるのではなく、意見の中の多様な思いやアイデアも空間に落とし込んでいくべきであり、細かいスタディが必要になってくると感じた。
- 地区スケールの考え方について。リニアな広場としてパークプラザのような形でフラワーロードと連動しながら公園広場的な位置づけにするのは、非常に良い考え方である。
- 基本計画の考え方について。新しい管理運営の形態を目指すのであれば、公設民営で公園の管理者（行政）と運営事業者（民間）が同じ建物の中で運営するケースもある。例えば公園の指定管理者と民間の運営事業者が協働しながら、公園のコンシェルジェのような形で公園をマネジメントするなど。緑関係のプログラムや環境教育は公園管理者が得意であり、音楽イベントやカフェ等の文化的プログラムは民間事業者が得意なので、一緒に交わる形で進めるならば、必ずしも南側に管理棟、北側ににぎわい拠点という位置づけだけでなくても良いだろう。
- オープンスペースでの取り組みでは、例えばパークレットはこれまで行政が主導であったが、今後のオープンスペースのあり方としては、旧居留地エリアに立地する周辺の企業（銀行や店舗など）の主導を引き出し、公園を核にしてエリアの価値を高めていく様な取組ができると良い。次年度以降は、基本計画の考え方で示された図より、もう少し広いスケールにおいて、既存の街路との関係性などの検討が必要になる。

- 葺合南 54 号線の現在開通している区間では、気候が良いとベンチを利用する人も多くとても賑わっている。しかし、今後都心の南側（みなとのもり公園）までの人の流れを作り出すためには、イベントなどの仕掛けがないと難しいだろう。
- 国道２号付近では、ポートオアシスから東側の、歩行者動線が非常にわかりにくい。ＨＡ

Ｔ神戸からみなとのもり公園や、フラワーロード、東遊園地へ人が流れるように、わかりやすく安全に歩ける整備が望まれる。ウォーターフロント開発でもマンションが計画されており、小学生が学校に通う通学路という視点からも分断感の解消が必要であり、子どもも大人も回遊しやすい都市が望まれる。

- 東遊園地の南北を分断している葺合南 58 号線がなければ、公園の使い勝手が各段に良くなるのではないか。見ている限りでは、交通量も少ないので、周辺の交通を整理すれば葺合南 58 号線がなくても成立するのではと考えてしまう。そうすれば、南北をつなげて一体的に使えるようになるため、様々に利用の幅が広がるのではないだろうか。

- 葺合南 58 号線については、公園の再整備にタイミングを合わせて検討してほしい。まちとのつなぎという視点において、そこまで視野に入れて都心の再整備を推進してほしい。

- 東遊園地にある彫刻のなかには、国際交流の趣旨で設置された作品もある。著名な作家の作品もあり、移設や再配置の検討は難しい問題であろう。
- 小学生が、東遊園地の歴史を学べるような展示が管理棟など拠点施設の中でもできると良い。
- 東遊園地のかたちは、歴史の中で変化してきている。昔は 1 号館南側の道路もなく、“万国橋”という橋が架かっていた時代もある。時代の要請に合わせて変化しているのが東遊園地である。今の時代にふさわしいあり方を検討する必要がある。

- 現在の東遊園地のデザインは、“象徴的”であり、“荘厳にみせる”デザイン（＝シンボル空間）であった。しかし、これからは、“市民の居場所”、“サードプレイス”としての機能が求められている。現代は、まちなかでの屋外生活が闊達になっており、その受け皿となる公園として、考えなおさなければならない。
- 今までの“シンボル空間”であれば、目的地として機能する必要があったが、これからの“サードプレイス”としては、通過や滞留等まちの動きに合わせていかなければならない。まちと連動・コネクトするために、公園、道路、都心三宮再整備等、各部門が共に事業を推進していくべきである。このような場合、調整が重要で、設備やプログラムなどについて、それぞれの役割を話し合わなければならない。例えば、“クロススクエアに大きな舗装広場が計画されているので、東遊園地には大きな舗装広場は必要なくなる”など、それぞれの大きな役割を再度整理して、関係部局ですみわけを明確にしたほうがよい。東遊園地は“木陰がある公園的な広場”、クロススクエアは“ヨーロッパ型の広場”という位置づけがよいと考えている。
- 都市スケールの考え方を、市民参加（地元、市民、企業）で考えながら進めることで、神戸らしさが生まれるのではないだろうか。都市計画や交通施策などの視点で事業を進めるのが行政の役割であり、全体の事業推進と共に市民参加を促していかなければならない。
- 「パークコネクト」の考え方を、他の関係部局とも共有していくべきではないだろうか。街全体を公園的な空間でコネクトしていこうという考え方なので、新 2 号館前の空間も、公園部局で描いてしまうぐらいの勢いが必要。
- 次年度は、都市スケールと地区スケールの間である、“地域スケール”において、例えば通学路や旧居留地との関係―ルートだけではなくプログラムでどう連携するか等の分析から、

拠点の位置を検討すると良い。地域スケールでは、クロススクエア～東遊園地～京町筋～南（ＷＦ）北（クロススクエア）～という回遊性の中で、東遊園地がターミナルや居場所になるかというスケールでの検討が必要であり、京町筋のありかたとも関係する。

■今後の事業の進め方について

- 北側園地の工事期間を含めて、仮設的な開催も視野に入れ、他のイベントと並行して進められるようなスケジュールとすべきである。リニューアルオープンからグランドオープンまで５～６年あるので、その間もにぎわいの継続性を担保できるスケジュールにしておく方が良い。

- 今後の事業の進め方に示されたスケジュールについて。庁舎建替えやクロススクエアの整備などのような長期スパンのプロジェクトに対して、東遊園地が一番先行するわけだが、どのように、地区スケールの考え方で議論し始めたような、新２号館のにぎわいや、クロススクエアの社会実験等と連携できるのかも考えておくと良い。また、東遊園地が工事中の数年間は、今まで盛り上がってきたにぎわい創出の取り組みを、場所を変えてでも継続できるような検討も必要だろう。

- 工事期間中を含めた予備設計を行うことなども考えられる。プログラムの実施は、例えば他のオープンスペースを活用するというようなことも検討してはどうか。
- 企業を含めた市民参画のしかけを考える必要があり、以下がポイントである。
  ① 場づくり（施設という意味ではなく、プラットフォームや会議体）
  ② 場が機能する実際の拠点
  ③ ①、②を、成長していく公園のプロセスとして、組み込むこと
- 今後の事業の進め方について、今後詳細を検討する際には、場づくりと整備と連動し、つながるような関係性ができると良い。

- 段階的に公園を整備していくという考え方において、企業や近隣の事業者が参画するというスキームであれば、そういう方々が準備をしていく姿が市民にも見える形で進めるべきである。みなとのもり公園でも、開園前の工事中の３年間程度、市民が花の種をまき、どんぐりの苗木を育て公園に植栽するというような取組を積み重ねた。そのような取組が、現在多くの方に利用されている理由のひとつと考えられる。
- 企業や専門家が関わるためには、まず拠点が必要である。関わる方が集い、話しができる場所が必要である。施設の内容については、その過程の中で、皆で決めることが望ましい。

- 昨今、企業では地域と関わるということを重視しており、現在、旧居留地では年に４回清掃活動を実施しているが、会員企業から 200 名程度の参加がある。旧居留地と東遊園地の関係性は深く、しかけや仕組みをつくる事ができれば、企業として関わっていくことができると考えている。その旗振り役は旧居留地連絡協議会でも担うことができる。

- 関連事業が多いので、全体のコンセプトが重要である。新２号館の足元や、クロススクエアとのつながり、国道２号のデッキ、まちとつながるそのほかの関連事業も含めて、全体のコンセプトは関係者間で協議をして、決めておかなければならない。それに基づいてそれぞれ

の事業を推進すべきである。公園が一番先に動くので、主導するのが良い。

- クロススクエアについては新聞報道もされており、神戸でまたとないプロジェクトとして市民の期待も高まっている。この期待感を活用しない手はない。「パークコネクト」という言葉の PR や、クロススクエアの事業においても東遊園地再整備のＰＲを行う等、両者で連携し、相乗効果をねらうプロモーションを進めるべきである。ぜひ「パークコネクト」という言葉を位置づけていくべきである。

- 特設 HP でのアンケート結果では、社会実験アーバンピクニックの成果が反映されているように思う。市民と行政が一体になってしかけたことに対する、市民のこたえであると思う。これは明らかなことであり、神戸市がみなさんの意見をふまえたうえで進める方向性とすればよい。アンケートの結果は非常に重たいもので、反対意見も踏まえて市民の意見を受け止めなければならない。

- デザイン都市型、シビックプライド型の公園というのをぜひ打ち出してほしい。観光も、市民が楽しんでいる姿を見にいく（観光客向けのコトではなく、市民がやっているコトを体験しに行く）という流れである。デザイン都市型、シビックプライド型というのは、市民にとって良くなるというだけではなく、それが、神戸の人間誘致、観光にも影響を与えるものだと考える。
- 東遊園地だけにとどまらない全体のコンセプト（パークコネクト(都市スケール)、地区スケール、地域スケール）が、公園を考える上での重要な考え方となる。神戸の都心戦略そのものであり、その中で東遊園地の位置づけを考えるべきである。
- 次年度は、プロポーザルで公募を行う際に、どのような基準を要求するかの検討が必要になってくる。予備設計なども考えられるが、形を決めてしまうのではなく、与条件として検討すると良い。
- 「成長する公園」という考え方は大切で、時系列で段階的な整備、仮設も含めた段階的なプログラムを考えるべきである。ハードだけではなく、地域を含めた仕組みづくりも段階を通じて成長させていく事を同時に考えなければならない。「今後の事業の進め方」をより詳細化するような作業が必要になる
- 次年度の社会実験では旧居留地との連携等にも取り組み、まちと公園をどうつないでいくか、まちの中の公園というコンセプトが重要である。それを具現化していくという発想で、次年度も取り組んでいただければと思う。